カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

日本の司教団は昨年2月、2022年から23年にかけての期間を「愛のあかし・元和の大殉教400年」として記念すると決めました。具体的には、昨年9月10日「長崎の元和大殉教」から、今年12月4日「江戸の元和大殉教」までの15カ月間。日本カトリック司教協議会列聖推進委員会委員長の大塚喜直司教は趣意書の中で、「日本の教会にとって共通の遺産である殉教者の霊性を学び、ともに祈り、殉教者の生き方に倣う機運を高め、福音宣教の力にしたい」と述べています。長崎教区では、この期間を記念のときとすると同時に、特に浦上四番崩れによる〝旅〟からの帰還150周年を迎えた今年は、迫害に遭いながらも信仰を守り伝えた先祖たちをしのび、記念してきました。「愛のあかし…」の期間を締めくくるにあたり、今年5月28日（日）浦上教会で行われた「『旅』の終わり150周年記念ミサ」における古巣馨師の説教を掲載いたします。数えきれない多くの殉教者たちを思い、また、これからの長崎の教会を思いながら、説教の言葉をあらためて心にとめましょう。

旅からの帰還150周年記念

「福音の香り」立つ長崎の教会へ

長崎教区司祭　古巣 馨

想い起こせば

「幼少のころ、祖母たちから聞いた『旅の話』を、私は今も心の奥底に大事にしまって居る。祖母たちは、囲炉裏の周りに集まると、それぞれの思い出を語り合うのであった。……寒中凍った池の中に、終日さらされたお話や、食物がなくてウジ虫を食べたお話など、今考えるとぞっとする様なむごいことも、その頃は『天主様のために堪え忍んだ』貴い功として、心地よく聞いたものである」

これは、1943年9月出版、浦川和三郎著『浦上切支丹史』の奥書を託された、片岡弥吉の文章です。旅からの帰還70年目、浦川司教67歳、片岡弥吉35歳の時です。「旅の話」が納められた『浦上切支丹史』は、大切なものを手渡し、しっかり受け取った人たちの証しです。浦上に原爆が投下されたのはこの2年後です。

繰り言のように同じ話をするのは、古き良き時代の美談や武勇伝を懐かしむためではありません。想い起こすと、力が湧いてくる話があります。想い起こすと、毎日のしんどさや、腐りかけた人生に、勇気と希望を与えてくれる話があります。想い起こすことから、記念は始まります。「これを、私の記念として行いなさい」（一コリント11・25）信仰は「記念する」ことです。キリストを想い起こし、今の生活に照らし、明日は顔を上げ、もっと良い人になろうと一歩踏み出すのが「記念する」ことです。

誠実な人の祈り

今年は、浦上と十数名の五島・伊王島の信徒を合わせ3384人が流罪とされ、金沢以西20藩・22カ所に流され、5年から3年におよぶ囚人としての苦難の生活から解放されて150年目です。この出来事を想い起こし、力と希望を得て、またオナジ心で歩み出さないと「記念」にはなりません。

ザビエルの宣教から今年で474年、日本の教会の歴史と静かに向き合い、そこに語られる神のみ言葉に耳を傾けると、長崎の教会は旧約のイスラエルの民と、キリストの十字架と復活を追体験するために、特別に選ばれた教会だと自然に手を合わせたくなります。

「神は本当にいるのか？ いるのならば、なぜこんな惨めで、不条理な人生なのか？ ここまでして、信仰は守らないといけないのか？」受けた大事なことを支えに生きただけで、「鞭打たれ、石を投げつけられ、故郷を追われ、…しばしば眠らず、飢え渇き、空腹と寒さに凍え、裸でいたこともありました」（二コリント11・23－29）福音のために苦労三嘆したパウロの呟きです。でも「誠実な人の祈り」に、神は必ず答えてくださいます。

捕囚の民の追体験

イスラエルの民は、二度、奴隷として異国に追放され「捕囚の民」となります。一度目はアッシリア、二度目はバビロンです。「流れのほとりに座り、柳に竪琴をかけ、シオンを思いすすり泣いた」（詩編137）のは、バビロン捕囚の時です。捕囚の民はたいてい絶滅して終わりました。「神などいない」と叫ぶ者に、「私はある、私は本当にある」とおっしゃるお方は、ときに、激しく歴史に介入します。「いかに美しいことか、山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は」（イザヤ52・7）「見よ、私は彼らを北の国から連れ戻し、地の果てから呼び集める。その中には目の見えない人も、歩けない人も…臨月の女もいる。彼らは泣きながら帰ってくる」（エレミヤ31・8－9）囚われ人への解放の福音と、帰国の途に就く人々の姿は、読むたびに胸があつくなります。長崎の教会も、「捕囚の民」の追体験へと招かれました。

1644年マンショ小西神父の殉教を境に、寺請檀那制度・宗門改めの中、教会は250年間、口をつむぎ、泥をかぶり、死んだふりをして最初の捕囚の時代を生きてきました。もう絶滅し、途絶えても不思議でないほどの時間が経っていました。でも、「人が忘れても、私はあなたを決して忘れない」（イザヤ49・15）と約束された神は、プティジャンを遣わし、沈黙の教会に「良い知らせ」を伝えてくれます。「ワレラノムネ　アナタノムネト　オナジ」

神のみわざに勢いづいた信徒たちは、まだ禁教令が続いているさ中、お寺への絶縁状を突き付けたのです。当時の英字新聞が報じたように、「明治政府の転覆をねらった宣教師の画策で、キリシタンに無謀な行動をとらせた」（1873年1月1日 The Times）のではありません。司祭到来は、潜伏という捕囚からの解放の知らせでした。その喜びから生まれた信徒たちの応えが寺請檀那制度との決別だったのです。

「国家神道」の御旗のもと、近代国家へと船出したばかりの明治政府は、財産も身分もない「キリシタンという長崎の田舎者」に、国造りの根幹を揺さぶられたのです。政府は「浦上一村総配流」の沙汰を下します。これが、2回目の捕囚「浦上四番崩れ」です。1868年6月と1870年1月の2回に分けて追放されます。

父と子のまなざし

2回目の追放のとき、大浦天主堂から3人の司祭が、その一部始終を見届けていました。秘密教会の一斉手入れの際、間一髪で逃げ延びたロケーニュとポワリエ、そして1868年10月に長崎に来たばかりのヴィリオンです。25歳の若きヴィリオンが目にしたのは、「信徒発見」のまばゆい奇跡の教会（マタイ17・2）ではなく、偏見と虐げが続く、いまだ、社会から見捨てられた、「孤独な水溜まりの教会」でした。

「信者たちはみな天主堂を仰ぎ見ている。十字架のしるしをする者もある。婦人たちはみな洗礼の時にかぶった白いヴェールを頭にいただいていて、信仰を公表している。何という光景！ 1597年の26人の殉教者、さらに17世紀の幾千もの殉教者が行った信仰宣言を、その子孫たちによって今もなされている、この勇敢な信仰宣言を、私は今、港の奥から眺めているのだ」（ヴィリオン『日本宣教50年』）この日のヴィリオンの日記です。そのページには幾筋もの滲んだ涙の跡があったに違いありません。

母マリアがそこにいた

ヴィリオンは信徒たちを見送ったあと、すぐに神戸に移り、離散した信徒たちの安否を確かめて回っています。飢えと寒さ、すし詰めの悪臭漂う生活を堪える信徒に、司祭たちは涙します。信徒は、どんなときも、自分たちに思いをよせる司祭のまなざしを探します。「もうどうでもいい」と思うほど辛く、折れそうなときも、独りではありませんでした。隣には、いつも祈りながら一緒に歩く家族や仲間と、イエスの十字架のもとから遣わされた母マリアが共にいました（ヨハネ19・26）。信徒と司祭がオナジいのちの方角を向いていたのです。

→2面へ続く

写真…今年5月28日、㊦大波止から浦上教会までのロザリオ行列と㊤「『旅』の終わり150周年記念」ミサ。

「ガザ人道支援」募金

カリタスジャパンは11月、「ガザ人道支援」募金の受付を開始しました。募金はガザ地区の人道的状況改善の活動のために活用されます。募金受付口座などの詳細は、各小教区またはカリタスジャパンサイトでご確認ください。

ほしかげ

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。…その名は、…『平和の君』と唱えられる」（イザヤ9・5）。イザヤの預言は実現した。「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」（ヨハネ14・27）▲「イエスさまは、わたしたちがお互いに傷つけ合わないというだけの世界平和を与えるために、来られたのではないのです。彼は、愛することから、つまり、他の人たちによいことをするところから生まれる心の平和を与えるために、いらしたのです」（聖マザー・テレサ）▲「お互いに許し合おう…お互いに不完全な人間だから、お互いに愛し合おう…お互いにさみしい人間だから。けんかにせよ、闘争にせよ、戦争にせよ、あとに残るのは後悔だけだ」（永井 隆）▲「わたしたちが気づかなくてはならない、大事なことがあります。ほんとうの意味で愛するということは、傷つくということなのです。事実、他の人たちを傷つけないで彼らに善いことをするためには、それが、わたしから何かを奪うことであっても、喜んで与えなくてはならないのです。…そうでなければ、わたしの中にはほんとうの愛は存在しないということになり、周りの人たちに、平和ではなく、不正をしてしまうのです」（聖マザー・テレサ）。〝平和を〟（三S）

旅からの帰還150周年記念

「福音の香り」立つ長崎の教会へ

↓1面からの続き

気骨ある人の従順によって

3年後、欧米諸国の非難と信徒を預かった諸藩からの苦情、そして、どんなに国家権力で脅され、折檻され、家族や仲間の非業の死を前にしても、決して屈せず、背中に一本筋の通った信仰をもつ「無知な田舎者」と侮った信者に、明治政府はついに根負けしました。秀吉から数えて286年続いた「キリシタン禁制の高札」を撤去し、「長崎県下異宗徒帰籍」を発布します。虫けらのように扱われても、受けた教えを誠実に生きる人たちを目の当たりにした為政者は、その16年後、1889年2月、「大日本帝国憲法」第28条で、「他人の迷惑にならない限り」という条件付きながら、「信教の自由」を保障したのです。気骨ある人たちの捧げた命と苦しみが、日本のすべての人たちに、「心の自由」という「実り」をもたらしました。

よい便りを伝える人の足

やがて、捕囚の民の帰還が始まります。「声を響かせ、賛美し…泣きながら」（エレミヤ31・7-9）神戸教会を目指した人の数は、同年4月22日の記録で2千人に達しています。

でも、5年から3年におよぶ飢えと渇き・氷点下の寒晒し・劣悪な牢生活は「誠実な残りの者」（ローマ11・5）の、帰郷の喜びさえ蝕んでいました。神戸や大阪に辿り着けず、まだ遠くの道端にうずくまったり、行き倒れて息絶えた人を道わきに葬ったりしている人たちがいると聞くたびに、ヴィリオンや大阪のクザンは、近隣の人力車や大八車をすべて借り上げ、総動員で迎えに走ります。解放されたからといって、「小躍りし、賛美の歌をうたいながら、勇んで戻る力」はもうなかったのです。でも、このときも、身を引きずりながら歩く信徒と、抱き起こし、支えて歩く司祭は同じ方向を向いていました。

追放された3384人のうち、亡くなった者613人、折檻と保身のため信仰を隠し1年前に戻った者1022人。そして、最後まで堪え忍び満身創痍で帰郷した「誠実な残りの者」1930人。待ち受けていたのは「お帰りなさい」という、労いや称賛の拍手とは無縁の、略奪と打ち壊された家、藪に覆われ、荒廃した畑地。慰めてくれるはずの故郷は見るも無残でした。最後まで堪え、帰還した1930人のうち「家のある者」1164人、「家のない者」766人と県の公文書に記録されています。

これが、帰還した教会の「新たな旅」の始まりでした。空腹と野ざらしの生活は、まるで流配地のようでした。このときのプティジャン司教の手紙を、フランシス・マルナスは『日本キリスト教復活史』に書き留めています。「政府は彼らの援助を約束しましたが、なかなかやってくれません。でも、彼らの兄弟である島々や近在のキリシタンが深い思いやりをもって、助けています。本当に立派です」

今年9月10日、『旅』の終わり150周年にあたり教区主催の十字架山殉教祭（長崎市辻町）

再び、オナジムネになるために

帰還した教会には、越えなければならないもう一つの大きな課題がありました。信仰を隠し一足早く戻った者たちと、「誠実な残りの者」たちの生活の格差と軋轢、そして反目。旅する教会の脆弱さが、痩せこけた人のあばら骨のように浮き出てきたのです。受けた体の傷よりも、狡猾さと裏切りによる心の傷はもっと根深く、やっかいでした。仮聖堂で一緒に祈っても、帰り道、挨拶の一つも交わせない。250年間、受け渡された「オナジ信仰」が試されました。傷ついた羊の痛みは、牧者の痛みです（教皇フランシスコ『福音の喜び』24）。主任司祭プトーが、辻町の丘に十字架山を建立したのは、赦しと和解の恵みがなければ、この教会は「新たな旅路」にも就けないし、「オナジ」信仰を手渡すこともできないと思ったからです。「憎しみや疑いを、愛と信頼に変えるのが、私どもの仕事です」（ヴィリオン前掲）ヴィリオンの言葉です。

ゆるしの恵みに応えて

こうして、皆でキリストの十字架のもとにひざまずき、赦しと和解の恵みに与った浦上は、また「オナジ」を生き始めていきます。赤痢や天然痘で倒れた人たちを介護し、親を亡くし、置き去りにされた孤児たちを抱き寄せ、「道端の隣人」（教皇フランシスコ『兄弟の皆さん』）になった教会は、長崎の町の「地の塩、世の光」（マタイ5・13-16）となりました。受けた信仰の真ん中にあった「慈悲の所作」は、赦しと和解の恵みへの応えです。出津のマルコ・ド・ロ、奥浦のマルマン、鯛之浦のブレル、天草のフィリエ。信徒たちは、慈悲の心を抱えて奔走する司祭の後に従い、どんな苦労があっても、ケラケラ笑いながら、「オナジ」わざを生きてきました。このとき、旅する長崎の教会は「福音の香り」（教皇フランシスコ上掲）を放っていたに違いありません。

「解放からの帰還」50年目、信徒たちとジャン・クロード・コンバス司教は、献堂したばかりの浦上天主堂の前庭に、『信仰之礎』の記念碑を据え、捕囚の民の出来事を忘れず、信徒と司祭と司教がオナジ方向に向かって旅することを誓ったのです。このとき長崎教区の信者は、ちょうど今と同じ5万5千人ほどを数えています。

「福音の香り」立つ旅路へ

あれから150年、長崎の教会は今、目まぐるしく変わる世の中で、「地の塩・世の光」になっているのでしょうか。どこを向いて、教会は旅しているのでしょうか。信徒と司祭と司教がオナジ方向を向いているのでしょうか。バラバラだと旅ではなくて、放浪です。「ワレラノムネ　アナタノムネト　オナジ」

(1) 親たちが命がけで手渡した信仰の続きを生きること、(2) みんなで〝オナジ〟キリストの方角に向かって共に旅すること、(3)「福音の香り」立つ教会になること、これを150年目の「解放の記念日」の決意にしましょう。

本の紹介

★津和野 乙女峠 37人の「証し人」

著＝筒井 砂
監修＝片岡瑠美子

1867年、長崎の浦上で、仏式の埋葬を拒否して檀那との関係を断つ申し立てを機に始まった、キリシタンへの近代の迫害。明治の新政府下でも迫害は続き、浦上の総村民3千人以上が22の地へ流配された。その一つ、島根の津和野の乙女峠には、過酷な拷問にも屈せず、信仰を守って命をささげた信徒たちがいた。

本書では、日本のキリスト教会宣教の歴史概説も加え、流配に至る、宗教・外交を含めた政治的背景や要因も解説。津和野での状況（人数、移送の経緯、収容施設、労作業、衣食、処遇、政府の指示、教会からの励ましなど）や、死に至るまでの具体的な信仰の証しを特筆する。

2023年4月9日発行。女子パウロ会、税別900円。

「浦上四番崩れ流配地案内」冊子 自費出版で発刊

浦上への帰還150年の節目に

本冊子は『旅』の終わりから150年を迎える今年を目標に出版を目指しました。

私たちの一番の悩みは、この冊子の本文の内容をどのようにするのかという部分でした。実際に各地に流配され苦しみを受けた浦上キリシタンの、本当の姿を表したいと考えて編集に取り掛かりました。中にはガイドブックとして作成したらどうかとの意見もありましたが、『旅』から帰った先人達の150年の節目にふさわしくないと考え、今回のような内容となりました。

冊子の作成に携わったのは、旧浦上教会（浦上、城山、西町、本原）の4小教区に属している信徒です。過去の歴史や薄れゆく流配の記憶と、命を懸けて守り抜いた信仰を後世に伝えたいとの思いから「浦上四番崩れ流配地案内」の冊子を出版しました。

当初予定していた有料本から自費出版本に変更したのは、種々の決め事が多く、私たちの希望する内容で本を制作することが困難となったためです。それで最終的に自費出版本での発刊となりました。

また、浦上教会と協働歩調を共にしてきた城山教会、西町教会、本原教会には必要部数を配布する予定でいましたが、広島教区のご要望に応えるために3小教区には少ない配布となりました。必要とする部数があれば再度教えてほしいと3小教区には連絡しています。

今回の冊子作成ならびに編集にあたり、広島教区の白浜 満司教様、長崎純心大学学長の片岡瑠美子様、カトリック中央協議会に派遣の（前浦上教会助任司祭）尾髙修一神父様、浦上教会の葛島輝義神父様より、貴重なご助言、ご協力をいただき感謝申し上げます。

「浦上四番崩れ　流配地案内編集委員会」
編集委員　深堀哲也、深堀　勝、本田秀暢（浦上教会）
委員　中ノ瀬 孝、藤田千歳、森田浩介、山田一俊、溝上由美子（浦上教会）松尾 勝（西町教会）川原敏行（城山教会）本山慎二（本原教会）

2023年9月14日発行

十主の平安
株式会社 五島式典社（斎場）五島中央会館 奈留会館
代表取締役　ヨゼフ　浦　昭
24時間営業
五島市上大津町 1385 番地 1　TEL (0959) 74 − 5551　FAX (0959) 74 − 5552
五島市奈留町浦 1899 − 1　TEL (0959) 64 − 3101　FAX (0959) 64 − 3102

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越
24時間営業・年中無休
受付時間 7：00〜22：00
水浦運送
シモン　水浦　幹雄
長崎市上野町12−3
TEL(095)(代)847−7151
携帯 090−7923−9005

CALIS Catholic Life Service
カリス通信 12月号
「カトリック司祭・修道会 医療費用・介護補償制度」のご紹介
各教区・修道会の聖職者の皆様を対象に、相互扶助の精神に基づいた互助制度「カトリック司祭・修道会　医療費用・介護補償制度」をご紹介します。2024年2月から介護補償の付帯が可能となりました。
【医療費用】
●特長　司祭、修道士、修道女、神学生等に、別途定める「カトリック共済制度災害補償規定」に基づき、災害発生時に見舞金を給付します。
・対象：教区、修道会、在俗会、宣教会に在籍される司祭、修道士、修道女、神学生等。
・加入：各教区、修道会等の在籍組織単位で一括加入。
●お支払する保険金
・葬祭費用見舞金：死亡時に、教区、修道会や遺族が葬式・祭祀に要した費用を実費で年齢による限度額を補償。
・傷害治療見舞金：ケガによる後遺障害の程度、ケガによる入院期間、通院期間に応じて見舞金を給付。
・疾病治療見舞金：病気による入院時に、入院期間に応じて給付。
【介護補償】
●特長　基本となる医療費用に任意で追加できます。原則、全員加入ですが、告知内容や年齢により加入できない場合がございます。
●お支払する保険金
・介護補償：保険期間中に公的介護保険制度に基づく要介護3以上の認定を受けた状態となった場合、または公的介護保険制度の要介護3以上に相当する状態であることを医師等に診断され、その状態が90日間を超えて継続した場合に、保険金を給付。
※制度の内容は「カトリック司祭・修道会　医療費用・介護補償制度」のパンフレットをご覧ください。詳細は契約者である団体の代表の方にお渡ししてあります保険約款によりますが、ご不明な点等ございましたらご連絡ください。
私たちが、お守りします。三條貴英　毛利玲子　山本泰彦　服部秀昭　川口 薫神父(顧問)
カトリック共済システム 有限会社カリス
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館
連絡先 0120-77-0033
カトリック共済システム 検索
23TC-004798（2023年10月作成）
引受保険会社：東京海上日動火災保険株式会社
リスク・補償に関してお気軽にお問い合わせください

カ障連の発足と長崎大会に向けて

障害者から私たちの信仰のあるべき姿を探し求めて！⑫ 最終回

「カ障連」…日本カトリック障害者連絡協議会

教区福音化推進部　紙﨑 新一

「ともに…つんのうで」（さあ、いっしょに行こう）

―インクルーシブ「誰ひとり取り残さない社会」の実現を目指して―

表題のテーマで、長崎で初めて開かれたカトリック障害者の全国大会（2023年10月14、15日）。秋の好天に恵まれ、本当にたくさんの皆さんからの協力を得て、参加者約200人、大会前日から延べ500人超のボランティアの方々が協力してくださり、多くの方々から素晴らしかったと言ってもらえる大会を開くことができました。

大会後の別れ際に、実行委員長水野氏が「一人でも多くの障害者が参加できる教会になったらいいですね」と語られました。このことばこそ、大会に向け汗水を流し批判を受け止めながら準備した実行委員一人ひとりと長崎教区の皆さんが受け止めていかなければならないことばだと思います。

カ障連長崎全国大会の２日目。意見を分かち合った全体会の様子。（2023年10月15日、長崎純心大学）

私が事故で障害者となった1980年の社会は、代議士もお医者様も神父様も〝偉い〟方々でした。一方、障害者は不具者とも言われ、人間として欠けた者とされていました。翌年、障害者の完全参加と平等を掲げ国際障害者年が国連で制定、この年、教皇ヨハネ・パウロ2世が訪日、教皇は東京で障害者との集いを希望され、翌82年この出会いをきっかけにカトリック障害者連絡協議会が発足しました。そして40年、長崎にカ障連の支部が発足し、一年をかけ、一大イベントの全国大会が開かれました。

最近、「ともに」がいろんなところで使われていますが、「ともに」は正しい理解と、ある意味で覚悟が必要なことばです。1960年代にノーマライゼーションが定義づけられて以降、世界は障害者に対する偏見や差別を乗り越えていく努力を続けています。2006年国連で「障害者権利条約」が採択されて、障害者の社会参加は40年前からは想像できないほど進みました。近年、社会福祉の世界では、「共感」や「傾聴」など、「ともに」が表現されるようになりました。国連や国が制定する条約や法律でも、障害について考える際、足が悪いからの医療モデルから、社会に障壁があるからの社会モデルへ進化し、社会の中で障害者の権利が守られるようになりました。こうして、社会は障害者と「ともに」歩む道をたどっています。

この間、長崎の教会も評議会が信徒使徒職だった2004年に、教会のバリアフリー化や障害者のトイレ設置を推進したり、2012年の名古屋全国大会に数人の障害者を率いて参加し、長崎支部の発足を試みたりしましたが、軌道に乗せるまでには至りませんでした。たぶん「ともに」が不十分でした。

30年前、みことばの分かち合いを始めた頃は、聖書、聖書とプロテスタント化してきたと批判を受けたりもしましたが、聖櫃と対に聖書を顕示する教会も増え、聖書が身近になりました。

イエスのメッセージには、「共感」も「傾聴」もすでに折り込み済みです。二千年も前から、主は障害者のみならず一人の人間として存在を肯定する術を示しておられます。これが倒れている人にとっての福音であり、「ともに」の教科書です。わたしたちは、学問でなく実存的に福音を分かち合いながら少しでもイエスの心である福音の響きに共鳴していくとき、その心で倒れている人にとっての隣人となり、障害者と「ともに」歩む教会を実現していくことができるはずなのです。

岩永マキ流配地・鶴島巡礼に参加して

お告げのマリア修道会

去る10月9日（月）『旅』の終わり150周年（1873～2023年）と題して、「浦上四番崩れ」岩永マキさんの流配の地、岡山県鶴島巡礼にお告げのマリア修道会からも約20人で参加させていただきました。鶴島の地には総勢220人が全国各地から集まり、共にミサがささげられました。

流配された人々が開墾したであろう畑も今は木や草が生い茂り、山道を歩いて辿り着いた先は、ここで亡くなった人々の墓（石）が山肌に並べられ、後に建てられた墓碑に名前が刻まれていました。

この島で3年8カ月どうやって生き延びたのであろうか？ 子どもまでいたという。お腹を空かせたままでの労働と責苦をどうやって乗り切ったのであろうか？ 一食抜いただけでもどうかなりそうな自分のふがいなさがとても恥ずかしくなる。いつの間にか便利さや簡単さを追い求め埋没し自分を鍛えることを忘れ、本物の修道生活ができていないのに気づく。

もう一度足を止め、何をどう生きれば先輩姉さんが生きた延長線上を歩くことになるのかを確認し歩きたい。本物を目指して神の国の完成に役立つ者になれるよう心に銘記し修行に励みたい。神様が喜ぶ道を選び直し、殉教の精神で苦痛と苦難から逃げずに前進できますように。（修道会会員）

牢屋の窄殉教祭

4年ぶりに地区行事として開催

10月22日（日）、久賀島の牢屋の窄殉教記念聖堂で、4年ぶりに浜脇小教区以外の信徒の皆様を交えて、牢屋の窄殉教祭が行われた（コロナ禍の間は浜脇小教区の信徒のみで実施）。そして、以前までは、浜脇小教区の主催でこの殉教祭行事が行われていたが、今年から下五島地区評議会の主催行事として開催された。

当初は強風が心配されていたが、当日になってみると当初の予想よりかは風は穏やかになり、晴天が広がる中で祈りをささげることができた。参加者は初めに久賀島小中学校に集合し、そこから徒歩40分ほどをかけてロザリオの祈りを唱えながら行列し、牢屋の窄殉教記念聖堂を目指した。行列参加者全員が到着し、ごミサが開始された。この日は、およそ150人以上が参加。殉教祭に参加した方の中には、「やはり、地区で集まって、皆で心を一つにして、殉教者たちのために祈ることができるのが良い」と、久々に集まってごミサをささげる喜びをかみ締める人もいた。

来年度の開催日は未定であるが、より多くの方々、下五島以外の方々にも参加していただけるように願っている。

浜脇小教区担当司祭　西田祐尚

キリシタン洞窟ミサ

上五島の信者ら約100人集う

10月22日（日）風もなく秋晴れの中、総勢約100人の上五島地区の信徒・司祭・修道者が集まり、キリシタン洞窟ミサが行われた。

当日は世界宣教の日でもあり、諸外国で働く宣教者たちの苦難を思った。同時に、自分たちの時代の困難さを分かち合い、弱い弟子たちが聖霊から力を得たことを思い起こしながら、厳しい迫害にも負けない先祖たちの信仰のたくましさは神の霊の働きから力を得ていたことを感じさせるひとときとなった。

ミサ後には、土井ノ浦・有福・大平の信者がまかなったおにぎり、ハマチの刺身、アラでだしをとったそうめん汁、お祝い事でもてなされるふくれまんじゅうを皆で味わった。普段の生活の中で食べてもごちそうであるが、ミサ後に分かち合い、野外で食べるごちそうは格別であった。

帰りの船の道中では、海上から見える土井ノ浦教会の写真を記念に撮る人もいて、記憶に残る1日を共に過ごした。

（土井ノ浦小教区）

〝地上だけでなく天上でも〟

教区主催追悼ミサ

11月5日（日）、教区主催の追悼ミサが、中村倫明大司教の主司式により、下五島地区の福江教会で行われた。このミサが地区を巡回する形になってから、これで1周したことになる。当日は約120人が集まり、亡くなられた全ての教区民のために祈りをささげた。

中村大司教は説教の中で、侍者の子どもとのやり取りを交えながら、「地上の教会でミサがささげられる時、天上の教会でもミサがささげられている、と言われている。目に見えている人数だけでなく、もっとたくさんの人と共にミサがささげられていることを思ってほしい」と語った。

また復活について、「霊魂だけが復活するのではなく、身体も復活する。それは、私の一部が復活するということではなくて、私という存在の全てが復活するということ。イエス様は御父の御心を繰り返し教え、そして『終わりの日に復活させる』と断言してくださった」とイエスが与えてくれる希望を説き、信者たちを励ました。

マリア・メレナ

松下紘子修道女

（純心聖母会）

10月13日逝去。82歳。長崎市生まれ。1965年初誓願、74年終生誓願宣立。初誓願後は幼児教育に携わり、長崎、広島、東京、鹿児島、名古屋などで34年の長きにわたり幼稚園の教諭を務めた。頓知が利く楽しい性格は、園児や保護者、教職員に慕われた。2010年最後の奉仕となった伊王島修道院では教会奉仕と主任司祭の賄いを務めた。19年療養のためロザリオの聖母修道院に派遣され、自身が出来ることを精いっぱい果たしていた。

今年9月下旬に体の不調を訴え、胃がんが判明。高齢のため手術はしないとの本人の意向をくみ、治療を続けた。その10日後に急変し、静かに御父のみもとに召された。

テレジア

浜端エスノ修道女

（お告げのマリア修道会）

10月15日逝去。89歳。五島市生まれ。1949年奥浦修道院に入会。58年初誓願、64年終生誓願宣立。入会後、看護助手として奥浦慈恵院診療所で、翌年開所した聖マリア病院で看護の仕事に携わった。20歳の頃、心肺機能低下のために治療を始め、療養生活を通して修道生活を送った。祈りを使命とし、心のこもった霊的カードを作って共同体に奉仕した。晩年は約3年間特別養護老人ホーム聖マリアの園に入所し、約5カ月間聖マリア病院に入院、アビラの聖テレジアの記念日に長い闘病生活を終えて御父のみもとに旅立った。

葬儀ミサ・告別式は10月17日、福江教会で行われた。

大明寺教会献堂50周年

馬込小教区 喜び分かち合う

10月29日（日）、大明寺教会（馬込小教区巡回）献堂50周年記念ミサが行われた。中村倫明大司教様の司式のもと、馬込や高島の両教会の信徒も含め約90人が喜びを分かち合った。

現大明寺教会は、旧教会の老朽化に伴って1973年に建て替えられたもので、旧教会は愛知県犬山市の明治村に移築されている。

中村大司教様は説教の中で、明治初期に遭った伊王島の迫害の歴史に触れながら「（同時期に建てられた）伊王島灯台の光のように、私たちも愛の光を照らしていこう」と宣教的使命に生きることの大切さを説いた。ミサの最後には、歴代主任司祭の1人であり今年司祭叙階銀祝を迎えられた岡秋美神父様のお祝いと、100歳を迎えられた小池ミツエさんへ特別功労として大司教様から特別な祝福をいただいた。

信徒会館に場所を移した祝賀会では、女性部のハンドベルと谷脇誠一郎神父（主任司祭）のギターのコラボ演奏や、豪華？商品の争奪抽選会などが行われ、楽しいひとときを過ごした。

節目の時にあたり、これまで支えてくださった方々、何よりも神様に心から感謝いたします。

（大明寺教会）

14人が一泊体験入学

長崎カトリック神学院

10月28日（土）から29日（日）にかけて長崎カトリック神学院で「神学院一泊体験入学」が行われ、小学5年生から中学3年生までの14人が参加した。

各教会から集合し、記念撮影をした時はまだ緊張の面持ちだったが、体育館でレクリエーションが始まると、すぐに打ち解けていた。ともに祈り、食事をし、勉強の時間を過ごした後、テグ教区から派遣された4人の韓国の神父様を取り上げた動画を鑑賞すると、神学生も、参加した小・中学生も感銘を受けている様子だった。

2日目は、神学校の生活や神学生の召命のきっかけ話を聞き、中村倫明大司教様の司式で感謝のミサをともにささげ、召命のお恵みを祈って2日間の日程を終えた。

この行事のため、お声かけをしていただいた皆様にお礼申し上げます。どうぞ引き続きお祈りとご協力、お声かけをお願いいたします。

（長崎カトリック神学院）

〝ブラジル移民の父〟天国の長八神父様にささぐ

中村神父渡伯100周年事業 講演会 浦頭小教区

10月29日（日）、ドミンゴス中村長八神父様の列福運動の機運を生誕の地でも高めることを目的に、マリア会の青木 勲神父様を講師に招き、浦頭教会聖堂において講演会を開催しました。

青木神父様は、ブラジルで33年間宣教活動に従事され、長八神父様の列福運動にも当初から携わっておられ、また、現在は東京・暁星小学校のスクールチャプレンとして勤務されています。

講演会は、この日に向けて作られた長八神父様をたたえる歌が当教会聖歌隊の素晴らしいコーラスによって披露され、続いて、長八神父様の生い立ちからブラジルへ赴くまでの歩みが紹介され、青木神父様による講話となり、主な内容はブラジルでの列福運動の起こりから最近の進捗状況などについてでした。

講話では次のように語られました。

「長八神父様は、日本全土に及ぶような広大な土地を、自分の足を頼りに毎日数十キロ、ミサの祭具を入れたトランクを抱えながら一軒また一軒と福音を宣べ伝え続けました。長八神父様の列福活動は、1967年日伯司牧協会の発足に始まり、遺産の調査・著述保全委員会発足、研究センター建築、2010年遺体検証などがあり、ついに新しい段階へと移り、枢機卿と担当司教による小委員会が2020年に発足し、よりいっそう動き始めています」

小教区信徒は強いまなざしの元、しっかり聴き入っていました。

浦頭教会信徒　木口重憲

家庭委員会が映画上映会

『桜色の風が咲く』280人が鑑賞

教区家庭委員会の長崎3地区は、「共に生きる学び」の活動の一環として、10月29日（日）カトリックセンター・ホールを会場に映画『桜色の風が咲く』（2022年）の上映会を開催した。

この映画は、9歳で失明、18歳で聴力を失いながらも世界ではじめて盲ろう者の大学教授となった福島 智さんの生い立ちを、長崎出身でカトリック信者の松本准平監督が描いたもの。真摯で温かな人間賛歌、母と息子が見いだしていく希望に満ちた未来など、実話をもとにつくられている。シグニスジャパン（カトリックメディア協議会）の第47回日本カトリック映画賞受賞作品。

上映開始直前には、松本監督から届けられたメッセージが代読され、自身がキリスト信者であること、映画製作に携わるまでの経緯などが紹介された。当日は約280人の参加者で会場が埋め尽くされ、終了時には拍手が起こり、「これからもこのような家族愛や人間愛に関する映画をぜひ企画してほしい」「教会にもこのようなシノダリティが必要ですね」といった声をかけられるなど、今後に期待する声を数多くいただいた。

（教区家庭委員会）

2020年
〝被爆75年から5年間のチャレンジ〟
https://nuclear-free.net/
核なき世界基金

2023神学院祭 最後の集いに各地から2千人

11月3日（金・祝）、福岡カトリック神学院において、2023神学院祭が行われました。1960年の「侍者の日」から半世紀以上もの長い間、福岡教区内外の方々との出会いと再開の場として行われてきた神学院祭も、来年2月の閉校に伴い、最後の神学院祭となりました。

当日は晴天に恵まれ、最高気温も27℃にまで上昇し、11月とは思えないほどの暑さでした。北海道から沖縄まで全国各地より約2000人もの人が駆けつけてくださり、ミサが始まりました。ミサの主司式は長崎教区の中村倫明大司教様、説教は大分教区の森山信三司教様が務められ、約50人の司祭団と16人の侍者の子どもたち、シスター方にも聖歌隊としてご協力いただきました。

森山司教様が説教で語られた「私たちは日々キリストの声に従い、眠りと覚醒を繰り返しながら、キリストの復活に与かるための準備を行っている」という言葉が心に残っています。ミサの最後に福岡教区のアベイヤ司教様の誕生日を皆でお祝いし、アベイヤ司教様からの祝福をいただきミサを終えました。

ミサ後は、子ども企画（ドッヂビー、綱引き）、院内カートツアー、古本市、何でも相談所、ロザリオ作りなどの催し物が行われ、たくさんの方々の笑顔が見られました。牧山強美院長の講演会もたくさんの方々にご清聴いただきました。

今回の2023神学院祭の開催にあたっては、多くの方々からご協力をいただき、無事に終えることができたことを心から感謝しております。個人的には、ワールドユースデーに一緒に行った神父様方、青年たちとの再会を果たせたことも大きな喜びでした。ありがとうございました。私たち神学生は来年以降、それぞれの場所で司祭職への歩みを続けます。その歩みは一人で成し得るものではありません。「タリタ、クム」（起きなさい）という私たち一人ひとりに向けられた主の呼びかけに応えながら、日々歩み続けて行くことができますように。これからもどうぞお祈りください。

福岡カトリック神学院
神学科3年　廣田 学

短信

〈シノドス第16回通常総会・第1会期が終了〉

10月4日（水）にバチカンで始まった世界代表司教会議（シノドス）第16回通常総会・第1会期が10月29日（日）に終了した（第1会期に関する記事は次号掲載予定）。第2会期は来年10月に開催される。

〈司教座聖堂献堂記念ミサ〉

長崎教区司教座聖堂（浦上教会）献堂記念日である11月1日（水）、18時30分から中村倫明大司教の主司式により記念ミサが行われ、司祭、修道者、信徒らが共に祈った。

〈赤城聖職者墓地ミサ〉

11月死者の月にあたり、7日（火）11時から長崎市の赤城聖職者墓地でミサが行われた。集まった信者らが、長崎にゆかりのある聖職者のために祈りをささげた。

ぶどう園

▼平戸ザビエル祭　12月3日(日)14時、平戸ザビエル記念教会。

▼朝祷会　12月19日(火)7時30分、中町教会で祈り。その後、朝食（各自持参）。※毎月第3火曜日実施。問合先…教区エキュメニズム・諸宗教委員会　竹谷神父（三ツ山教会）

▼一日の祈りの集い　2024年1月25日(木)三浦町教会。みつあみの会主催。各教会に配布の案内を確認の上、開催日の1週間前までに申込み。定員15人。参加費500円。TEL 095・847・7411

感謝

―香典返し―

長崎大司教区
長崎カトリック神学院
●吉浦博昭様（褥崎）
故マリア吉浦チク様

右の方からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー（株）
代表取締役　ドミニコ　溝口悦雄
〒858−0926　佐世保市大潟町586
TEL(0956)47−4380

世界平和へ祈りを…
明治石材
長崎本店　長崎市城栄町13-1
大村店　大村市赤佐古町287番地
HP　http://meijisekizai.shopinfo.jp
業務内容
お墓建立
納骨堂販売
お墓のリフォーム
霊名彫刻
電話（095）846-3598
電話（0957）50-3008

マイホームの美容と健康に！
（有）山川㊥塗装
有限責任中間法人　全国住宅火災防止協会
長崎県建物営繕工事業協同組合理事
代表取締役　ペトロ　山川　進
佐世保市原分町1715-5
TEL(0956)49-3330　FAX(0956)49-8729